

2 北海道独自の文化へ



謎の岩面刻画

1866(慶応2)年に小樽市の手宮洞窟^{てみや}で岩に刻まれた文字や絵のようなもの(岩面刻画^{がんめんこくが})が発見されました。当時、文字とも考えられていましたが、1950(昭和25)年に余市町のフゴッペ洞窟で日本最大級のものが発見され、これらが文字ではなく絵であることがわかりました。フゴッペ洞窟の岩面刻画は、1～4世紀ごろの縄文文化^{じょうもん}のものと考えられています。しかし、この刻画はユーラシア大陸などとの共通性はなく、岩面に絵を描く文化がどこからきたのかは謎のままです。

2千数百年前になると、北海道では縄文文化^{じょうもん}が終わり、縄文文化から擦文文化^{さつもん}へと、独自の文化が展開します。

縄文文化は、2千数百年前から7世紀ごろまで続きました。この文化がはじまるころ、西日本に大陸から朝鮮半島を経由し稲作と金属器が伝わり、東北地方まで弥生文化^{やよい}が広がりました。海峡をはさんだ北海道では、稲作は行われませんでした。わずかに鉄器が伝わったことにより、狩猟、漁労、採集の技術などが発達しました。人びとは、やがて北海道と本州、サハリン(樺太^{からふと})との間で活発な交流を行うようになります。

擦文文化は、7～8世紀ごろ、本州の文化の影響を受けはじまりました。それまで使っていた縄文がついた土器と石器がなくなり、土師器^{はじき}に似た土器や鉄器が使われるようになります。人びとは河口近くに集落をつくり、狩猟や漁労のほか、アワやヒエなどの雑穀を栽培していました。この文化は12世紀ごろまで続きました。この時期には、本州との交易がさかんになり、鉄の道具がたくさん北海道に入ってきて、人びとの生活も変わっていきました。

この文化とは別に、5世紀ごろ、それまで北海道に住んでいた人びとの文化とは大きく異なる文化をもった人びとが、サハリンから北海道のオホーツク海沿岸にやってきて、やがて千島列島まで広がっていきました。大陸の文化の影響を強く受けたこの文化を「オホーツク文化」とよび、9世紀ごろまで続きました。人びとは、主に漁労を行い、クジラやアザラシなどの海獣を獲り、大陸や本州との交易を行ったことから、「海洋の民」といわれています。

縄文文化と擦文文化は本州と深いつながりを持ち、オホーツク文化はサハリンや大陸などと深いつながりをもっていました。このように、北海道では北や南の文化の影響を受けながら、本州とは異なる地域性豊かな文化が展開していきました。



オホーツク文化 一人びとの祈り

オホーツク文化の人びとは、クマやクジラ、アザラシ、鳥類など多くの動物に対する信仰をもっていました。網走市のモヨロ貝塚や北見市常呂町の栄浦第二遺跡^{さかえうら}などでは、住居の奥にクマやシカの頭の骨を積み上げた骨塚^{こつづか}や、別な位置に海獣類や鳥類の骨を積み上げた骨塚も見つかっています。なかでも、クマに特別な意識をもち、土製品、牙・骨の彫刻、土器などに表現しています。



交流と交易のひろがり

オホーツク文化の遺跡からは、帯飾り^{なんぎょく}、軟玉などが見つかっています。これらは、アムール川(黒龍江^{こくりゅうこう})中下流域の遺跡から見つかるものと同じものです。オホーツク文化がサハリン(樺太^{からふと})や大陸などと深いつながりをもっていたことがわかります。一方、擦文文化は、本州と深いつながりをもっていました。交易でさまざまな鉄器を手に入れ、本州の須恵器^{すえき}や土師器^{はじき}が北海道全域に広がります。この時期、北海道を中心に北と南につながる2つの交易ルートがありました。